マクラーン海岸の南蛮人とそのイメージ

村山和之

――はじめに

ホルムズガーン州都バンダレ・アッバースより東方における我々の踏査は、ミーナーブを経て南下し、オマーン海に面したバンダレ・ジャースクを往復してひとまず終了した。けれども、ジャースクよりさらに東に目を転じれば、このマクラーン海岸沿いに点在する漁港コナークや大港湾都市チャーバハール、パキスタンをのぞむグワータルといった、スィースターン・バローチスターン州の未踏の港湾都市がまだ残されている。

パキスタンにおけるバローチスターン州マクラーン海岸については、既に三度の踏査歴があり、ある程度はその風土になじみが深かった。特に、一九九九年の訪問時に記録した叙事詩語りの芸能（バッラワーン）の演目に、ポルトガルと戦ったバローチ民族の英雄譚があったことを知ってから、機会があればぜひともその演目をマクラーン海岸で楽しみたいとも思っていた。パキスタンとイランに跨って居住するバローチ民族の共有財産の一つバッラワーンを題材に、その芸能文化や伝承さえも国境によって分断されてしまったか否かを問うてみたかったのである。

バンダレ・アッバースそして、イランの首都テヘランで調査グループのメンバーを見送ってから、私は一旦、空路と陸路を使って国境を越え、パキスタンへ渡った。

テヘランからスィースターン・バローチスターン州都ザーヘダーンへ飛び、車を借りて一時間ほど走ると国境の町ミールジャーヴェが右手に見えてくる。簡単な荷物検査を経てガスストーブ臭い出入国事務所を出ると、そ

むらやまかずゆき
一九六四年生まれ。イメージ文化学科兼任講師。南西アジア文化研究。

こはパキスタンのバローチスターン州である。時差の関係から、時計を一時間半進めなければならない。「一跨ぎ一時間半」の余韻にひたる間もなく、埃っぽいパキスタンの国境町クーエ・タフターンで入国審査、税関、闇両替、バスの予約に追われた。最後の乗客として私を押し込んだ日野製の長距離バスは、一路東へ、州都クエッタを目指して六〇〇キロメートルの夜の旅を始める。夕食休憩を含めて一〇時間の、比較的快適な旅であった。道路が全行程舗装されているのが大きな理由であろう。

クエッタに五日ほど滞在し、バローチスターン大学バローチー語学科を訪問した。バローチー語文学の専門家で、自らマクラーン出身のスブール・バローチ先生から、ポルトガルと戦ったバローチの一族長ハンマル・ジーヤンドについて基本的な講義を受け、テキストリーディングと調査対象地選定をも行なった。テキストは、バローチー・アカデミー発行のグルハーン・ナスィール(1914-81)著『バローチー戦争詩(1979)』を元本とし、ハンマルと聞いて誰もが思い浮かべる名場面・名台詞の箇所を絞り込んだ。

バローチー語を母語としない、あるいは得意としないクエッタ在住の楽師たちは、この演目を歌うことができない。元来、マクラーン地方で盛んな叙事詩語りのスタ

図1　ポルトガル砦（ティース入り口の丘上）

図2　北崖からティースの町と南崖を望む

図3　ティース北崖の墓穴群

図4　ティース北崖のバーネ・マッスィーティー

イル「パッラワーン（勇者・力士）」において好まれる演目である以上、マクラーンの楽師に会うべきだと助言を受けた。イランのマクラーン地方を訪問する予定が旅程に組まれていたので、チャーバハールを拠点に、イラン～パキスタンを自由に往来する人気歌手ゴラーム・ラスール・ディーナールザイを探し当て、「ハンマル」のパフォーマンスの依頼をする方針を固めた。

再びイランに戻ると、ザーヘダーンから空路でチャーバハールへ飛んだ。チャーバハール空港は、チャーバハール市街から西へおよそ五〇キロ離れたコナーラクにある。けれども、自由貿易地区が近年開発されたため、その設備は最新である。「三重交通」の文字がくっきり残る連絡バスをおり、出てくる荷物を待つ間、エアコンが効いているターンテーブル室まで入り込んで客を待つタクシー運転手の一人と話がつき、件の歌手について尋ねてみた。彼自身は知らなかったが、仲間の運転手から彼の住所を聞きだしてくれた。この歌手が、本当にこの町のどこかにいることが、これで明らかになった。

――チャーバハールとバローチ文士たちとの出会い

現在でこそ貿易港となっているが、チャーバハールは、もともとバローチ人の小さな漁港であった。町の北方五キロの地点に古港跡ティース（古名はティーズ）がある。この町の名は古く、バローチー語の叙事詩にも残っている。海岸の小高い丘にポルトガルが築いた砦（カラート）（図1）と城壁の遺構が残り、ティースへの門となっている。現在のティース（図2）は、三方を丘に囲まれた小さなバローチ人の村落である。丘の斜面には無数の集合墓穴（図3）が見られ、バンダレ・ターヘリーのスィーラーフ遺跡を思わせる。けれども砂岩であるため、風化が著しい。また、洞窟の中に小さなドームをいただく聖所バーネ・マッスィーティー（図4）がある。

チャーバハールでは、旧市街のセピーデ・ホテルに四泊した。歌手の名前以外は何も手がかりはないし、知人の一人もいない全くの処女地であった。セーターが必要だったテヘランと違って、この町では半袖でも汗が頬を伝い落ちてくるし、ブーゲンビリアが色鮮やかに繁っている。

幸いにも、歌手の住所は宿から近かったので、荷を降ろしてすぐ、徒歩で聞き取り調査に赴いた。ハーフェズ通りに店を構える人びとに、一人一人、ペルシア語かバローチー語で聞いてゆく。ところが、手ごたえが今ひとつよくないのだ。洋服を着たペルシア人はともかくとして、民族服を着たバローチ人が知らないわけはないはずであるのに。諦めて帰ろうとする前に、最後の一軒として製材所のベンチに座るバローチ人紳士に尋ねた。彼は、歌手の居所が分かったら知らせてやる、と言ってくれた。名前をきくと、ムハンマド・ハンマルザイ！　これは絶

対に運命だと確信した。これでもし駄目でも納得しようと私は思った。ところがである。道草しながら、宿への道を帰る私に、バイクから声をかけてくれたのは先ほどのハンマルザイ氏であった。

「彼はいまカラチへ行っていてこのチャーバハールにはいない。けれども情報はある。クエッタのバローチスターン大学教授サバー・ダシュティアーリーを知っているか？　彼の仲間の文士たちが集まる店があるから一緒に行こう？」

恐ろしいほど早い情報網、もちろん異存はない。バイクの後ろに乗せてもらい、走って一分もたたないうちにバザールのなかの小路を折れ、小さな雑貨屋兼本屋であるストールの前で下ろされる。店主は、旧知の間柄だったかのごとく嬉しそうに、私と挨拶（サラーム）を交わし座らせる。ハンマルザイ氏は微笑を残したまま、ひっそりと去っていった。

店主であるマスター・ラシード氏（図5左）は、サバー先生の話をするや、得意そうにイランで出版しているバローチーの本を見せてくれる。カセットはパキスタンで出ているものが多いことにジャケットから察せられた。

この小さなストールが、この町のバローチ文士たちのサロンの機能を果たしているなどと誰が予測できよう、ましてや初めて来たばかりの外人に。しばらく店番をしている間、隣の時計屋のトルコ人から、バローチ人は自分たちのスタイルに囚われていて発展しないばか者だ、という話を聞いていた。タバコを一本、すすめられるままにくわえ、ペルシア語でうなずき、相槌をうっていた。

すると、どこからともなく男がさっそうとあらわれ、挨拶をしてくる。この人がモッラーバフシュ・ラーイース氏（図5右）であった。彼はこの町におけるバローチ文化振興運動の若きリーダーである。アリーバフシュ・ダシュティアーリー氏が一九九四年に創設したバローチ文学協会である「バルーチ・ラブザーンキー・ガール

図5　ラシード氏(左)とモッラーバフシュ氏(右)

図6　チャーバハール文士横丁

Baluch Labzanki Gal」の副委員長（naqib sadar）をも務める。パキスタン・スィンド州ミールプル・ハースに生まれ、幼いころイランにきた。初代パフレヴィー時代に迫害されたバローチたちは、現在のパキスタンへと逃げて行ったのが、三〇年前頃から故地に戻り始めたという。ウルドゥー語もできる。詩、歴史、文化についての著作多し。文化遺産局のメンバーでもある。アフリカ系太鼓ムガルマーンについてもすぐ分かった。チャーバハールにはなく、空港に近い村ボグにあると聞いたという。また、この町には三〇〇人をこすバローチ人の詩人がいるという。

彼は、サバー・ダシュティアーリー教授や、私の友人でナポリ東洋大学講師をしているバダル・ハーンのこともよく知っている。サバー先生は三週間前までここに滞在していたという。毎年一カ月半くらい来られて、イランのバローチー文学活動について調査している。わずか一〇メートル四方のこの文士横丁（ムハッラ）（図6）を「チャーバハールのラクノウ」と名づける粋人である。夕方に同じ場所で会うことにしてホテルに帰る。こちらの目的を聞き、歌手の情報や手配など調べておいてくれるという。昼食にホテルで食べた海老のカバーブは、どこよりもおいしかった。

昼寝をして午後六時頃、ラシード氏の店をたずねると、若い男二人が軒先でなにやらテープに聞きおぼれている。バローチー語の対談録音であることは分かったが、はたして誰が話しているのか。店主は笑みをうかべながらこれまた得意そうに「サイード・ハーシュミーとアター・シャードの対談だ、分かるかな？」と嬉しそうに語りかけてくる。

バローチー現代文学そして言語運動を代表する二大巨頭であることは知っている。サイード・ハーシュミー・アカデミーはカラチで活動するバローチー語の出版局だ。アター・シャードはクエッタ留学時代、地元テレビ局の対談番組を見ていたこともあるし、本屋で何度か挨拶を交わした程度だけれど。彼ら故人の対談に熱心に聞きいるイランの若きバローチ文士たち、彼らを指導するかのように惜しげもなく大切なコレクションを聞かせる先輩ラシード氏。ここは、まるでイランにおけるバローチー文学の寺子屋のようだ。明後日、この街で行なわれる文学協会主催のムシャーイラ（詩会）の招待状を届けるために、私に会いにきてくれたということがすぐ分かった。ありがたくお受けする。

メガネをかけた小柄な男が握手を求めてきた。彼は向かいのストールの店主ムハンマド・イスラム氏。巨匠の冠こそ戴いてはいないが、誰もが認める優秀な歌手である。彼は自分のストールに私を座らせると、バローチー古典詩のレクチャーをバローチー語で、身振り手振りも交えて始めだす。まるでDJのように店の棚からテープ

を取ってはラジカセに突っ込み、詩の内容を悦に入りながら説き明かしてくれる。楽器こそないけれど、これはこれで立派なステージだ。並べられているテープを見ると、印刷されたカセットレーベルなど一枚もない。すべて手書きで歌手名と歌の名が記されているだけだ、しかも大衆向けの流行歌など一本もない、正統バローチー古典や若手の新作のみを集めたこだわりの店だったのだ。テープ講義が進行する間にも、次から次へと文学協会のメンバーが声をかけてくる。ムッラーバフシュの言うとおり、ここはチャーバハール文学界のサロン、バローチスターンにありながら北インドの文芸都市ラクノウに相当する一画だと言って間違いはないだろう。しかも、文学と音楽を英語で語る文士は誰もいない。ここでは、バローチーが雅語なのだ。

「ハンマル」についての講義が終わる頃、ムッラーバフシュが「日本から来た客人のために実際に歌ってやってくれ。ムハッラムの期間（シーア派の聖なる月）ではあるけれど」と頼みを入れてくれた。イスラムは「ほかにどんな歌が聞きたい」というのでいくつかリクエストをする。彼の講義はこの間にも途切れることはない。

――ハンマルとポルトガルの戦い

ハンマル・ジーヤンド（Hammal Jihand）は、一六世紀の一時代、マクラーン海岸の古港カルマト（Kalmat）一帯を支配するホート・バローチ族の族長であった。実在した彼は、三種類の物語の主人公として、民衆の中に生き続けている。

一つは、民話に語られるハンマルで、勇敢で美貌に恵まれ、狩猟と女を愛したキャラクターで知られる。ラス・ベーラの恋人の家に向かう道すがら、ライオンと遭遇した彼は、恐れもせずに一撃の下に斬って捨てる。その時、ライオンの動きを止めようと言い放つ脅しの文句が勇ましい。

「俺は豪傑ハンマル、七人の女を妻とする者だ。クエッタ、シーシャ、マストゥング、ハーラーン、カラート、ラフシャーン、そしてパンジグールで待つ妻たちの家を、この馬に跨り一晩で全部めぐることができるのだ！」[Zuberi 2002 : 37-38]。

もう一つは隣接するコールワーの族長チャーカル（一四世紀の民族的英雄チャーカル・リンド・バローチとは別人）との戦いにおける勇敢なハンマルの歌がよく知られる。私たちが、一九九九年パキスタンのグワーダルで初めて接したハンマルの歌は、この主題であった。しかし彼の名は、同じバローチ族のチャーカルとのライバル以上に、母国沿岸を冒すヨーロッパ船、とりわけポルトガルとのバローチ族の名誉をかけた戦いを主題とした英

雄譚の主人公として最も名高い。

一五〇六年、ポルトガル王エマヌエルとインド副王ドン・フランチェスコ・デ・アルメイダの時代、マクラーン海岸地帯においてポルトガル船団が占領した港や町邑のリストが残っている[Badalkhan 2000：153]。当時、紅海からペルシア湾、マクラーン海岸、インダス川、ディーウ、グジャラートに至るこの地域を、九区域に分けて呼んでいた。その第二区がキルマン[Chirman]で、マクラーン海岸ベルト全域、インダス河口までを指していた。キルマンには二つの在地王国があり、マクラン（マクラーン）とマデルという。グワーダルやカルマトなどの町の名前もポルトガルによって記録されている。

ポルトガル船団にとってホート族の船団を束ねるハンマルは、強力な好敵手であった。いく度となく海戦を戦い抜くうちにハンマルの脅威は深刻な問題となってゆく。国際政治の視点から眺めれば、ペルシア湾の覇権をめぐってオスマン・トルコ帝国と競合していたポルトガルにとって、親トルコのバローチ勢力は脅威であった。また、シーア派を国教と定めたペルシアのサファヴィー朝にとっても、トルコに対抗する同盟者を必要とし、同時に東の辺境地帯で、反ペルシア行動を続けるスンニー派のバローチ族を、征服せねばならなかった。ここで、両国の利益は一致し、ペルシアとポルトガルは急接近することとなる。一五一五年、ホルムズ島を占領したポルトガルに対して、サファヴィー朝シャー・イスマーイール一世からの大使が派遣され、対トルコ、対バローチにおいて相互協力の合意がなされた。

ここから、ハンマルとポルトガルとの戦いを詠った叙事詩の断片をはさみながら、およそ五〇〇年前に起こった戦いのイメージを再現してみよう。「ハンマルとポルトガルのいくさ」（hammalay potgezi jang, hammalay parangi jang）の通称で知られる一連の作品から。

ある日、ホート族の仲間たちと舟遊びに興じていた彼は、突風に進路を見失い、一週間漂流した末に陸地に辿りつく。ところが、上陸しようとしたハンマルらは、ポルトガル船の攻撃にさらされることとなる。彼らは、流されて、インドの西海岸にあるポルトガルの基地近くまで達していたのだ。勇敢な戦いぶりであったハンマルだが、愛用の剣を海中に失くし、同行者たちの逃亡も災いしてただ一人、敵船の虜囚となってしまう。

鳥の翼のような帆をはためかせ　四艘の船が寄る
ハンマルの船を取り囲み　四方の道をふさぐ
ハンマルは船越しにその言葉をきく「召し捕ったり」

cār gurāo ant gon murgī carroken bānzulān
hammale šāgīšcapp cāgirdā giptag ant
twārīš　kut ki mā tarā dazgīr kanān

[Nasir 1976：254]

手から滑り落ちる愛剣にハンマルは問うた

「戦士たる剣よ、息子にして真珠のような娘よ
雨の季節は、柔らかな布で包み錆から守った
湿った日は、俺の絹シャツの中で錆から守った
なのに、なぜ異教徒の白頸を掻き散らさぬか
獅子の如き我が拳より逃げ落ちるのは今なぜか」

hammalā gwānak pa panjagen zarmuštā jatag
teg sifāhāni man tarā bacci pyāstag o durren dutagī
hōrāni wahdā gajjaren bopānī talā
nambānī wahdā man qabāhān abrešumen
tō rok na bītē man kāfirē gōren gardinā
ac manī šerī panjagā parce darsutē ?

[Nasir 1979 : 146]

拉致されたハンマルは、敵の司令官からその勇猛果敢さを評価され、彼の娘と結婚してポルトガルのために働くよう勧められる。娘のほうはハンマルを気に入ったが、肝心の彼にはまったくその気がない。断固としてキリスト教への改宗と、縁談を拒否する態度を崩さないハンマルに、業を煮やした司令官は、彼を独房に閉じ込め、水と食料を与えぬ拷問を科した。ハンマルに恋をした娘は、牢の看守を欺き、食事を差し入れに忍んできて求婚する。

ところが、愛妻マハガンジを忘れることができぬ彼は、朦朧とした意識の中でさえ、その申し出を断ってしまう。ヨーロッパの女性よりもバローチの女性を好んだとされるハンマルの民族愛がうかがえ、その内容からこの歌は祝時の際に、女性たちによって好んで歌い継がれている。ハンマルは以下のように言い放った。

俺は物憂い瞳しめらすバローチの女が好きなのだ
長いチュニックを纏い二重のショールで美姿をも覆う
ハンマルは南蛮女どもは好きにならん
短い丈のブラウスから　薄汚いへそまで見えてる醜さよ
極上のチャンガーラーン椰子を蠅と一緒に食える野蛮人

manā watī mulke kāḑ xumār cammen dost bant
pušk o šalwār o sarīg šāren cādar ant
jān parangānī hammalā pasand na bant
lapiš dana antt nāpaganī kanḍiš dar ant
ke nāi cangālān gon makiskān īr bar ant

[Nasir 1979 : 142]

この拒絶は彼女にとって屈辱であった。司令官がもう一度彼を牢から引き出し、心が変わったかを問うた時、傍らに座る彼女は父親に、自分とキリスト教がハンマルに侮辱されたことを耳打ちした。さらに、この男は大変危険であるから殺してしまわない限りは、いつの日かポルトガルの大敵になるのは確実だと添えた。そんな状況

においてもなお、ハンマルは改宗して生きるより、バローチの妻と家族を守って死ぬ道を選んだ。敵からの要求の無条件拒否である。仕方なく司令官は、彼を死刑にせよと命令した。殺される直前、ハンマルは故郷のマクラーンの空に向かい、辞世の句を詠んだとされている。この歌の一例が、バローチー語のテキストブックに教材として掲載されている。前半の、ハンマルの辞世の句である部分をここに紹介する。

おお　海を渡りくる雲たちよ　ハンマルの便りを伝えてよ
ハンマルの音沙汰　今でも待ってる家族のもとへ
ろくでなしのヨーロッパ人どもが　ハンマルを捕らえたのだと
灰茶色の縄が　生きた蛇のようにハンマルに絡みついたのだと
今にして思えば不吉な前兆　ハンマルの自信がまいた種
共に海に出た仲間といえば　臆病者の漁師メードども
敵を見たらば　逃げ去った　そこには恥も　約束もない
おーいお前(恋人)、俺の晩飯用に粉をもうひくなよ！
俺の晩飯のために　羊を屠る手もとめてくれ！
大好きなお前、俺を偲んで泣き歌うでないぞ　いまここで！
お、俺の姿を探して泣くな！
ハンマルは南蛮の女子どもは好かぬ
顔を洗わず神の名も唱えぬ女子ども
魚と蟹を蠅と一緒に食える女子ども
衣みじかく　臍まで見えてる醜さよ
ハンマルは物憂い瞳しめらすバローチの女が好きだった
長いチュニックにショールを重ね　美姿をも覆う女たちが

o zirī nodān hammale pegāmān barit !
pa kahebīā bambawen dostāe sar kanit !
hammalā besūten parang dastgīr kurtagant
kambaren rez co lasshen mārā wārtagant
hammalā šūmen gwātsarī trānān giptagant
ā hamrāhi bedilen medān betagant
likkatant pemānānā šā pākā raptagant
dost manī šāmā melaben gandīmān madroš !
pa manī cāštā kīrgen gaṭṭorānā makuš !
o manī māhī pamman nī zahīrokān majan !
āh o pirīyātān pammanī bālādā makan !
jan parangānī hammalā hicc dost nabant
dem našodant o nai hudāī nāmā gīrant
mahī o cingašk gon makiskānā ir barant
puške gonḍ ant o nāpagānī kanḍiš dar ant
hammalā mulke kāḍ humār cammen dost bant
puške drāj ant gon sarī o sarcādar ant

[Barker-Mengal (vol.2) 1969 : 306-313]

大航海時代の舞台裏で上演されていた、バローチとポルトガルの接触劇は、世界史の重要な一ページに掲載されることはない。けれども、この叙事詩に描かれている場面のいくつかは、現実の事件として起こったことなのである。現在でも、マクラーン海岸の港湾都市にはポルトガルとの接触に因んだ史跡や伝説が多い。グワーダルやイラン側のティースにはポルトガルの要塞跡が存在する。さらに西方の小漁村ガンズは、ポルトガルとの関係から色白碧眼の血筋が残る部落だと言われている。

自身の名誉と家族、そして民族全体の名誉を一人で守り抜いて異国の地で亡くなったハンマルは、明らかに誰からも好まれる英雄である。バローチ民族の掟を遵守した彼は、理想の男性像の一人として現在でも愛され語り継がれているのである。

最後に記した以下の歌は、ハンマルの妹が亡き兄を偲んで残したといわれる歌であり、誰もが暗誦できる名句となっている。

土曜と一六夜は髪を洗ってはだめ　兄をもつ同胞たち
土曜は兄さんの喪に服す日一六夜は父さんの厄日
土曜の日そして一六夜　不運の日
ハンマルは船出して帰らぬ人となったのです

šambe o šāṇzda sar mašod brātāni guhār
šambe pa brātān šarr na int šāṇzda pa pitā
šambe ei roc o šāṇzda ei šūmen sāatā
hammalā šāge nol kuta o šūmen eqrabā

[Nasir 1979 : 139]

では、次節では、ハンマルの歌を含めたパフォーマンスが行なわれた模様をフィールドノートのまま紹介する。

――フィールド・ノートから「チャーバハールのバローチー音楽会」

三月一八日午後六時。前日に打ち合わせた約束の時刻。この時間にバザール（図7）にある文壇ストールに集まり、バローチー古典音楽会に向かうことになっていた。ビデオカメラの準備もよし、小さな三脚を自由貿易地区

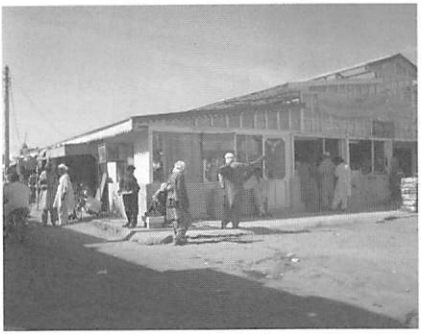
図7　チャーバハールのバザール

図8　イラン最新の自由貿易地区
（チャーバハール）

（図8）で買い求め、バッテリーも充電してある。ところが、なぜかみんなの私を見る目が伏目がちだ。こちらの聞きたい演目を事前にメモして、昨夕は楽器なしで講談をぶって張り切っていた歌手のムハンマド・イスラムが目をあわせない。問いただしてみると、音楽会は午後二時に変更されており、私無しで行なわれてしまったということだ。「そんな話まったく聞いてないし、知らない。約束どおり六時にここにきたのに」と驚く私を、申し訳なさそうな視線でなだめようとする彼ら。不貞腐れて、座り込み、「これも運命なら諦める。だけど残念だ」と愚痴をこぼし、遠目でこちらの気をうかがうイスラムには一瞥もくれてやらない。

初対面でも仲間になれてサラームと握手を交換し合う、そんな楽しい日暮れ時を、このまま不愉快な気分でいなくてはいけないのか。そもそも、この音楽会も、私を楽しませようと彼らが企画して呼んでくれたもので、商業契約を交わした「仕事」ではない。では、なぜ私を呼ばずに成り立ってしまうのかが、よりいっそう分からない。

そんな自問自答にも疲れた頃、ムッラーバフシュがバイクでやってきた。彼も、なぜ二時に来られなかったのかと聞いてくるので、同じ返答をすると、「それはこちらの連絡不備だ。楽師たちも歌手たちも今ここにいるから、いつだってできる。いつ聞きたいのか」と話をふってきた。もうどちらがどれほど悪いかが問題ではない。明日の朝はみんなそれぞれ仕事があるだろうから、今夜がいい。

彼らの声が大きくなった。場所はどこがいいか、連絡をとれる楽師はほかにいるか、手配に驚くほど手際がよい。こうして何とか、ふくれ髭面の大きな子どもをなだめようと、その日のうちに、音楽会が開かれることとなった。何と非難されようが、子どもには食べ物をねだり、だだをこねる権利がある。

場所はハーフェズ通りを二〇〇メートルほど歩いて、左折した奥にある民家の客間であった。私たちが到着したとき既に数人の男たちが着席しており、水タバコをふかしていた。撥弦楽器タンブーラグと擦弦楽器スローズ、バローチー音楽に欠かせない楽器のペアも待機している。これで本当に音楽会が始まるようだという安堵感が生じた。仲間や歌手がぞくぞくと、一〇畳ほどの部屋の壁際を埋めてゆく。楽器のチューニングもかねて、アブドゥル・レヘマーン（図9）がスローズの演奏を披露した後、その楽器は、アリー・ムハンマド・バローチ師（図10）に渡され、彼の絶技がみなを唸らせる。[*1]

遅れて到着した歌手はムハンマド・イスハーク・マザール・バローチ（図12）。彼が今夜のメイン歌手である。リズム・タンブーラグを弾いていた眼鏡の青年はアブドゥル・サマドで歌手である。ばつがわるいのかさらに遅れて入ってきたイスラムも含めて、三人の歌手による合

＊1　本音楽会の楽士たちは、みな、職能音楽集団ローリー（またはウスタ）出身ではなく、アターイーと呼ばれる非職能音楽家たちであった。

図11　Pallawan Performance

図9　アブドゥル・レヘマーン（Abudul Rahman）

図12　ムハンマド・イスハーク・マザール・バローチ
（Mohammad Ishak Mazar Baloch）
50歳以上、チャーバハール生。
歌手、タンブーラグ奏者（モダン古典歌手。）
師匠はカンマールこと Mulla Kammal Khan、彼の伴奏者として一緒に活動中（パキスタン、湾岸諸国）。音楽活動は20年目、以前は仕立て屋をしていた。楽器は自分で作らない、10年来使っている現在のタンブーラグはカラチのマリールに住むサーレ・ムハンマド・マリーリーから得た楽器である。チャーバハールを代表するアターイー歌手の一人である。

1. Hani Shey Murid
4. Balochi Ghazal
5. Dad Shah

を歌ってくれた。

図10　アリー・ムハンマド・バローチ
（Ali Mohammad Baloch）
46歳、チャーバハール生。
スローズ奏者、アターイー音楽家。
師匠は叔父ゴラーム・ハイダルで、80歳にして現役のスローズ奏者である（この日は映画音楽の音入れのためにテヘランに向かっていた）。在地の大歌手カンマールの伴奏者として一緒に活動中。スィースターン・バローチスターン州の音楽賞を受賞した経歴がある実力者。楽器はパキスタンから購入する。この音楽会のリーダーを務めた。

計して五曲のバローチー語の歌を聴くことができた。

歌唱のスタイルは、恋歌（ガザル）の一曲以外は、みな身振り手振り語りも交えて、叙事詩の英雄を甦らせる、パッラワーン（図11）であり、各自が直接語りかけてくる、一時も視線をはずせない迫力がある。

イスハークは、目前にいる私を直視し言葉を選んで歌い始める。本筋に入る前にかなりアドリブで、挨拶、神への賛歌、楽器への賞賛の部分があったと思う。演目は[*2]「シェイ・ムリードとハーニー」。チャーカル・リンドとその友シェイ・ムリード、妻のハーニーが登場人物。もしも最高の楽師がいますぐ来たとしたら、私はどんな贈り物でもくれてやる、こう宴の席で公言したシェイ・ムリードに、チャーカルは金を握らせて楽師をおくり、「ハーニーを贈り物としてくれる」よう仕向ける。そこから、悲劇が始まるのだ。

二番目に登場したアブドゥル・サマド（図13）は「バーラーチ」を披露してくれた。

あの山たちは　バローチの砦なり
Kohani balochani kalat

いつか訳したこともある有名な一節も、[*3]バーラーチが登場する戦詩（ジャンギー）の冒頭を飾るものだった。

われらがイスラム（図14）は、年齢からも音楽活動歴からもこの中では一番下っ端だった。照れくさそうに、しかし一番興味のある詩を熱唱してくれた。ポルトガルに拉致され異国の地で殺されたという、ハンマル・ジーヤンドを、彼の妹が偲んで歌ったとされる詩である。

土曜と十六夜の日は　髪をあらってはだめ
兄の喪に服す日だから
Shanbe o shanzda sar mashod bratani gohar

途中でつかえながらも、ゼスチュアたっぷりに聞かせて見せてくれた。この訪問のなかで最も重要かつ貴重なパフォーマンスであり、それをビデオに記録できたことはありがたいの一言につきる。今までの経験から、短い民謡は別として、長い叙事詩となるとこちらが予習してリクエストした演目が、目前で披露される可能性は大変低い。どうしても、楽師側のペースでメニューが進行してしまうことが多いからだ。その理由は、演目によって得手不得手があり、不得手な演目を素直に「できない」と言うことを、プロのプライドが邪魔しているからであろう。ところがイスラムも含めてチャーバハールの歌手たちは、できるできないを、率直に明言してくれたのだ。これは大変珍しい。ローリー出身の歌手でなかったからこそ取れた姿勢であったのかもしれない。いずれにしても今後の足がかりにもなり、感謝している。

＊2　この演目については、「表現学部紀要第三〇号（二〇〇二）」（和光大学）の村山論文を参照。

＊3　「東西南北」（一九九八）中の村山報告、「傀儡師たちの道」138を参照。

イスハークが歌詞カードを見ながら、なめらかな詩を歌いだす。語りではなく謡いであった。そして、最後となった演目は「ダード・シャー」。イランのバローチスターンを代表する民族的英雄で、パフレヴィー時代にイラン政府と戦った。彼をたたえる詩は、グワーダルで先月亡くなった詩人ムッラー・アブーバクル・カルマティー（Mulla Aba Bagr Kalamati）の詩集「マッリーン・マタルス mallin matarus」の第一節に収められている。この本は、翌日にラシード氏からこの詩人を偲ぶ文学集会の帰路プレゼントされた。この土地においてもバローチの人びとは、国家体制側と常に対峙し戦ってきたことが分かる。パキスタン側で現在とりかかっている、ブラーフィー語やバローチー語の、白人やパキスタン支配との戦いを描いた民族運動愛国歌「エングラービー」との関係からも注目してゆきたい。

最後に、楽師間交流とメディアの話を聞いた。パキスタンとは双方とも頻繁に交流があるとのことである。パキスタンからはカラチのヌーラルやトルバットのアリフ・バローチといった現代歌謡曲（モダン）の流行歌手たちがチャーバハールを訪れている。

イランからもムッラー・カンマール・ハーンやグラーム・ラスール・ディーナールザイらがカラチ、ハイデラバード、グワーダル、ピーシュカーンの地でステージを飾っている。もちろん、湾岸諸国でバローチ人口の多い

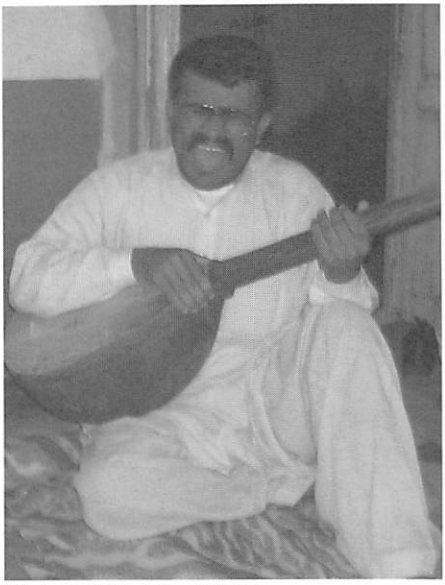

図14　ムハンマド・イスラム
(Mohammad Islam)
30歳、チャーバハール生。
歌手＆タンブーラグ奏者。アターイー音楽家。
師匠はスローズ奏者のアブドゥル・レヘマーン。音楽活動歴は３年目。自ら詩作も行なう。バローチー語の戦争詩（ジャンギー jangi）、宗教歌謡（イスラーミー islami）を好んで歌う。本職は紳余曲折ありながら、音楽テープ＆雑貨ストールの店主。
3. Hammal Jihand
を歌ってくれた。

図13　アブドゥル・サマド　・
(Abdul Samad)
40歳、チャーバハール生。
歌手＆タンブーラグ奏者。アターイー音楽家。
師匠はアリー・ムハンマド。音楽活動歴10年。詩作も行ない、好きな詩はバローチー古典詩の中でも特にジャンギー。ペルシア語のガザル（サアディー、ハーフェズ）も歌う。まだ駆け出しなのでチャーバハールの中だけで活動している。本職は公務員で交通局の部署にいる。
2. Balach
を歌った。

オマーンやカタール、バハレーンなどでも長期滞在型プログラムをこなしている。バローチー語のラジオ放送は、現在、ザーヘダーン放送局から毎朝一時間「サーヘ・マクラーン（マクラーンの息吹）」が放送されているが、ブラーフィー語の放送はないという。

すべてのプログラムが終わり、参会者たち全員で写真を撮った（図15）。フッカ（水タバコ）をふかし、曲げた膝を紐で縛るバローチ式座法の男性の素性は、最後まで分からなかった。帰路は大きなトラックの助手席に座りイスハークに送ってもらった。彼は日本車だというが、はて。夕食はこの旅で最も遅い、夜一〇時にとれた。

――おわりに

チャーバハールのバローチ人たちは、結論からすると、パキスタンの同マクラーン地方に居住するバローチ人と同じ民族文化の中で生きている、と言い切ってよいと思われる。けれども、それはマクラーニー文化と呼ばれるアラビア海、オマーン湾沿岸のマクラーン・バローチ文化圏の領域内においてのみ、限定つきで可能なのである。

イランにしてもパキスタンにしても、内陸高原と沿岸部では、同じバローチ人といっても、その地域ごとに特有な社会システムの違いから、別種のバローチ人文化圏が見られるものだ。

チャーバハールの前に滞在したザーヘダーンのバローチ文化は、パキスタンのクエッタにおけると同様に、複数文化の坩堝としての都市をステーションとして成立している。そこでは、イラン人、アフガニスタン人、パキスタン人などの他民族が絶えず集散を繰り返している。その都市に住むバローチ人は、ペルシア語を第一言語として使用しなければならない。イラン人に、イランの都市に適応しなくてはならない。元来の伝統的な部族慣習法マヤール[*1]は、表面上、その美徳を発揮する機会が制限されてしまった。それでも、シャルワール・カミーズを纏うし、独特の皮サンダルを履いて、バローチの信号を発してはいる。

一方、マクラーンは、両国ともに、首都からも州都からも遠く離れた辺境地をたてに、完全なるバローチ人の世界である。彼らは、自分たちのバローチー語文化を謳歌している。マクラーンの人びとが、大変平和的で親切なことも共通している。イランにあっても、ミルクを入れたチャーイを飲み、パキスタンと同じ食事をし、洋酒や音楽を楽しんでいる。

今回、幸運にも立ちあうことができたパッラワーンの芸能も、基本的には両国ともに同じ物だと考えてよい。そこには、国境において分断されたバローチ文化というものは見られなかった。彼らに、国家同士が取り決めた国境線は無効であった。むしろ同民族内で定められた縄張りが大きな意味を持つ。水利権や徴税権など、国家が

＊4　＊1論文参照。

知ったら許されない権利をめぐっての、部族社会内での掟が大きな意味をもつのである。

口承文芸の世界を振り返ってみると、イランにおいてもまったく同じ演目が行なわれている。彼等にとってみれば、チャーカルやハンマル、シェイ・ムリードたち英雄の叙事詩は、自分たちの民族的遺産として何の違和感も無い共有文化の一つだったのだ。もちろん、地域特有の英雄を歌った作品は存在するけれど、マクラーンにおける地域文化の中では、それとて、国を隔てても同様に享受されていることが、今回の調査でよく理解できた。

「マッコラーン　マッコラーネーン（マクラーンはマクラーンである）」とバローチー語は、明るく響く。この格言とも取れる合言葉は、両国のマクラーン・バローチ人に共通の自律的共同体意識の表れと解釈できる。その言葉が、発話され続けている以上、魚とナツメ椰子と酒と歌を愛するマクラーン人に何度でも会いに足を運んでしまうことだろう。

図15　音楽会参会者たち

[引用文献]

Badalkhan, Sabir 2000 Portuguese encounter with coastal Makran Baloch during the sixteenth century. Some references from a Baloch heroic epic. *JRAS, Series3*, 10.2. pp.153-169.

Barker, Muhammad Abd-al-Rahman 1969 *A Course in Balochi.* McGill Univ. Press. Montreal. and Aqil Khan Mengal

Elfenbein, Josef.H. 1990 *An Anthology of Classical and Modern Balochi Literature*. Otto Harassowitz. Wiesbaden.

Nasir, Gul Khan 1976 *Balochistan ki kahani, shairon ki zabani* (Urdu). Quetta／1979 *Balochi razmiya shairi*(Urdu). Balochi Academy. Quetta.

Zuberi, Jamil(transl.) 2002 *Folk Tales of Baluchistan*. Royal Book Company. Karachi.